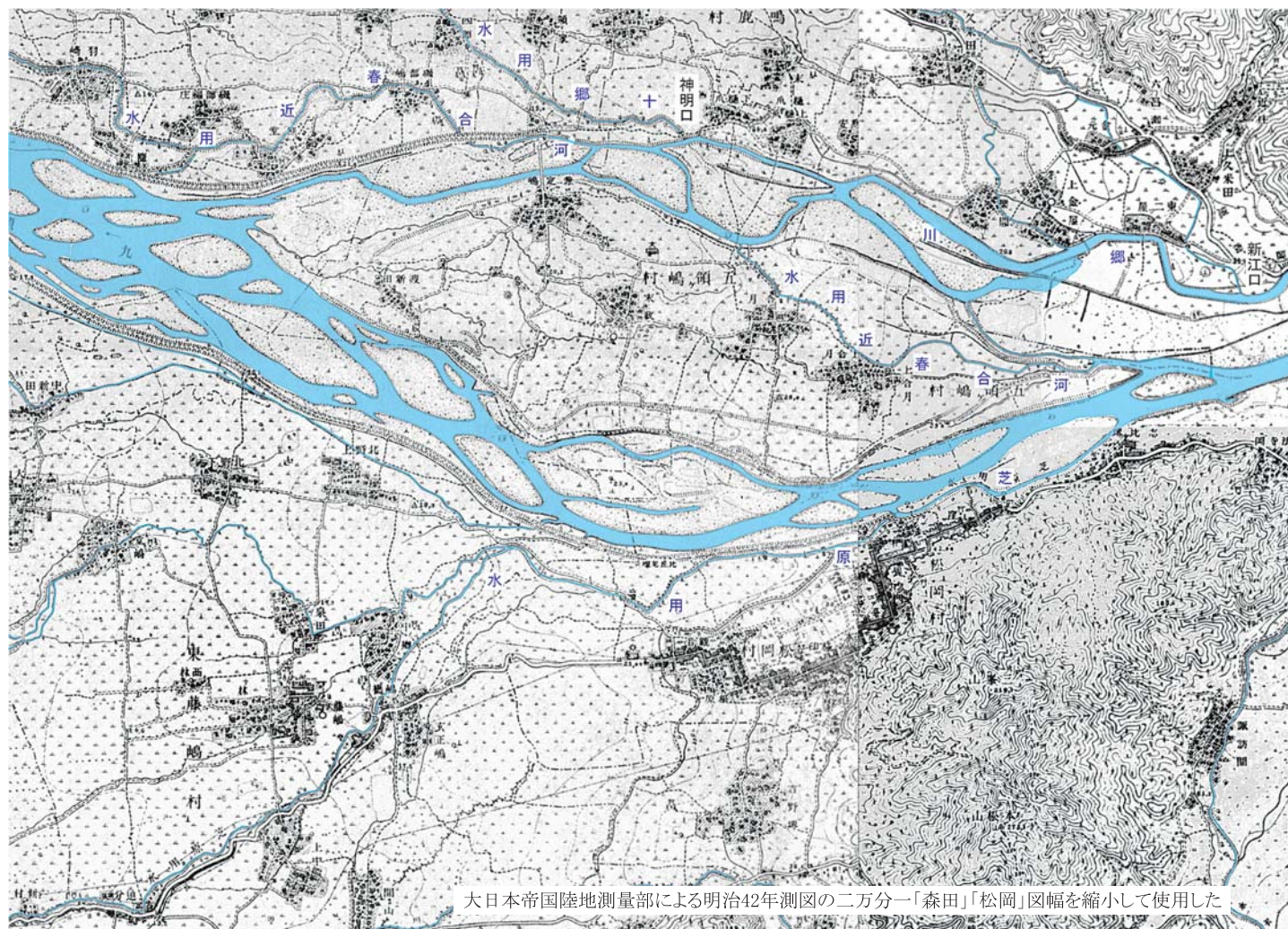


越前三大川沿革図 九頭竜川之図 部分 明治初年 松平文庫 松平宗紀氏所蔵 福井県立図書館保管



九頭竜川（十郷用水など取入れ口付近）

県内最大の河川九頭竜川が福井平野に流れ出るところには、早くから大きな堰が築かれ、左右の平野に幾筋もの用水路が開かれた。幕末から明治初期の様子を示すこの図でも、鳴鹿舟橋の下の本流筋にはいくつもの大きな堰が描かれている。

まず最上流には十郷用水の堰が築かれ、十郷川（裏川）に導かれた河水は、新江口などで分水されたあと、神明口から取り入れられ、右岸の坂井平野の約一二〇か村、六万六千石余の地をうるおした。また、十郷用水堰のすぐ下流には河合春近用水堰が築かれ、河水はいったん裏川に落とされたと、神明口下流の用水口から取り入れられ、同じく右岸の坂井平野の三〇か村、二万石余の田地をうるおした。

本流筋河合春近用水堰よりさらに下って芝原用水の堰がある。図では半分のみ描かれており、ここから左岸に取り入れられた用水は四万石余の田地をうるおすとともに、福井城下にも導かれた。

洪水のたびに川筋を変えようとする暴れ川に堰をかけ、必死に水を得ようとする各用水組の利害がこのわずかな部分に集中し、その利害の微妙な調整の上に成り立ったこの取水システムが、動かしがたいものとして引き継がれている様子は、左の明治末年の二万分の一地形図上でも確認することができる。

大規模な堰堤を建設し、各用水の取入れ口を一か所にまとめる工事（頭首工）が完成したのは一九五五年（昭和三〇）であった。